

画家と長生き―野見山暁治の絵を考えつつ考えたこと

千葉正也

友達にI君ちゅうやつが居まして、そいつが、不思議な箱を持ってたんですね。みんな夜集まってそいつの家に行って、何か、誰かのいい感じの車で近くのコンビニなどに行ってシュークリームだのコーラだのポテチだの買ってきて、ザッパとかリー・ペリーとかそういう皆で楽しめる音楽をかけて、いい感じの雰囲気をつくるんですよ。何となく楽しいななんてなった時に、ちょうどいいタイミングで、I君がパカーっとその箱をあけるワケですよ。箱は渋谷で買ったって言ってました。

そうしたらその箱の中からパーっと甘い匂いが漂ってきて、あとちょっと光ってて綺麗なんですよ、その中身が。そしたら段々気持ちよくなってきて、ザッパとかさっきよりも10倍くらい真面目に聴けるようになって会話とかもみんな真面目なもんだから楽しいんですよ。真面目っていうのは凄く楽しいですよ。あと気持ちいいですよ。

真面目が一番楽しくて気持ちいいんじゃないかな……？

そんな感じで遊んでたらある日、たしかお台場のほうの海の近くのでかい公園に遊びに行こうという事になりまして、なんか誰かのすげえ早そうなクルマで行ったわけです。ゴツゴツしてテカテカした車だったな。車の中でもI君が不思議な箱をパカーっとするから、運転もくそ真面目、助手席で景色見てる俺も真剣、しかも気持ちいい。そのクルマで公園の脇にバンと乗り付けてみんなで真面目な話ししながらフラフラ勘の赴くままに歩いてたら、通りすぎりのエロい女の子達に指差されて「あの人達、チョウゆっくり歩いてるー！！」って言われました。真面目じゃない奴が真面目な奴見るとゆっくりに見えるんですよ。知ってましたか？

それから歩道を逸れて芝生みたいな所に入って行って、そこは凄く眺めのいい海が見えるところで、ずいぶん高い崖みたいな所でした。みんなで寝っ転がって芝生にほったこすりつけたり、近くに生えてるデカイ木の表面をペタペタ触ったりしながら楽しいな、なんてしてたら突然I君が崖の方に歩いて行って柵を跨いで、（東京じゃ珍しいかーい崖なんですよ）真面目な顔してこう言ったんです。

「死んだら気持ちいいかな？」

俺はその一瞬で色々直感して、考えがハッキリしたんです。いわゆる快樂主義みたいな考えは全部違うな、と思いました。あと、（死ぬような真面目さ）みたいなものともあんまり関わりたくないなと思いました。

I君に「その気持ちいいのはずいぶん先にとっとけ！」といいながらI君の肩をつかんで崖から引き離してる時から今までずっとそう思ってます。よく、「死ぬ気でやれ！」なんて言う人がいますが、あれは馬鹿だし有害ですよ。俺は何でも、たかが絵を描くのも、死ぬ気でやったら十日で死ぬ自信ありますよ、そんな自信を自慢すんなって話なんですけど……。そもそもそういう事簡単に言う人は、世の中不真面目な奴ばっかとタカを括ってるんですよ、そんで真面目な奴見つけて「もっとテキパキ動け」とか言うんです。ムカつきますよ。

それでその後、俺とI君ともう一人U君って奴でこういうのがあるからイケナイんだって事になって、その不思議な箱をスニーカーで蹴り入れてぶっ壊したんです。真面目だろうが気持ちよからうが行き着く先が崖の下みたいな物は俺たちには要らないんです。箱は見事に壊れて中身がパヤーっと霧散して行って辺りに均一に溶け込んでいきました。それ以来、俺の真面目さは、そうやって環境に溶け込んだ所にあるから色んなところから不意に現れておお、久しぶり、なんて暮らしてる訳です。そういうのも良いもんですよ。そう思います。

今書いたのはちょうど10年くらい前の話で、それから俺もいろいろありまして今は自分で自分の事画家だ、と思って暮らしています。ひとにも俺は画家だと言っていますし。俺はとにかく、他の事は全然続かなくて、そもそもコンビニのバイトをクビになった事もあるくらいで、駄目な人間なんですよ。で、とにかく思い返せば暇をもてあましたり、落ち込みすぎて何も考えたく無い時なんかになんかいつも絵を描いてたな、と思ひまして、絵だけはずっと描いてられると思ひまして。はっきり言って絵を描いてなかったら俺の人生メチャクチャになってましたよ。

絵というやりかたは、今のこの世界の中では、なんだか効率も悪いし馬鹿みたいな感じもしますが、案外におもしろいやり方なんじゃないかという、なにか確信みたいなものが自分の中に在ります。解っているのは俺はとにかく面白い絵が描きたいんです。中には発表しようの無いおかしな作品も在りますが思いついた事は可能な限りとにかく試します。

10年前にぶっ壊した箱の中身はちょうど良くまだそこら中にころがっているんですね。家の近くに二本松という交差点がありましてアトリエに車で向かう途中にいつもその信号で引っかかるんです。その度に右の信号の下の空中に縦2m、横1・5mくらいのキャンバスを思い浮かべて画面の右上の所にみどりの線で丸を描くイメージをします。その次に真ん中よりやや左下くらいのところに今度は赤い線で丸を描きます。信号で停まっている時間は長くても一分ちょっとなのですが、毎日の様をやっていると 本当にそこに俺にしか見えないスゴく抽象的な絵が出来てくるんですよ。実際は何もないんですが。

俺は時々、何に絵を描くべきか？という事を悩んでしまう事がありまして、だから空中に念力で描くみたいなアホな事も試してしまうのですが、キャンバスでは無いものに描いた方がいい時もありました。新潟で廃校になった小学校の図書館の絨毯をはがして描いた事もありますし、友達が恋人とイチャイチャしている家におしかけて、今、仲良く二人の体を包んでいた毛布を三千円で売ってもらってそれに描いた事もあります。しばらくは女の人の甘い匂いが絵から漂っていい感じでしたよ。

先日は、思うところあって『自画像』を描いてみたくなりました。キャンバスに描くんじゃなくてもっといい支持体はないかな、と色々考えて、人の顔面に描いてみたいと思ひました。それで誰の顔に描こうか？と思ひて考えていたら舞台女優さんの顔に描きたいと思ひたんです。前に舞台を観た時があつて、ぐっと力んで声を張って芝居をされている人を観たら、なんか顔面を遠くに飛ばしてるように見えたんです。そういう物体は舞台女優さんの顔くらいしか無いと思ひて、そこに自画像を描いてみたいと思ひました。真面目に考えたらそうになりました。

たまたまつてがあったもんで、女優さんに話をしてもらったら快く引き受けてくださいました。女優さんの顔を肌荒れさせたら大変なので、舞台メイク専用の絵の具を新宿で買ってきて準備しました。自分の左足のすね毛をそって練習したりしました。当たり前なんだが肌に肌を描く訳だから予想していたよりもずっと精度の高い絵が描けるという事が解りました。

それで当日、はるばるアトリエまで来て頂いて描かしてもらいました。椅子に座って動かないようにしてもらって描き始めました。描く事に夢中になっていると、人様の顔面に描いているという事を忘れる瞬間があるんですね。で、何かの拍子に女優さんが笑ったりすると、キャンバスがグッと動いて笑ったように見えました。これは画家としては凄い体験でした。自画像を描いていたらその絵が笑ったんです。で、鏡を見たら俺もニヤニヤしてるからそれをまた女優さんの顔に描いた訳です。

描き上げるのに4時間ほどかかったのですが、描かれている方は暇ですよ。キャンバスは人間じゃないから暇だとかそういうのは無いですけど。その間次に出演する舞台の台詞の練習をしても良いですか？と言うのでどうぞどうぞ、言いました。俺が顔に自画像を描き込んでいる間その女優さんの口はとても印象的な台詞を暗唱しました。「ちがいますよ、あなたは人の肉を食べるような人じゃありませんよ」とか「あなたは検事殿ですよ 立派な人ですよ」とか「私には 見えませんよ しかし あなたにはよく見えるはずなんです よく見てください もっと近くに寄ってよく見てください。」

こういう不思議な言葉を言いながら女優さんは芝居の世界に入っていました。俺はまたニヤニヤした表情を浮かべていたのでそれを女優さんの顔に真剣に描いていました。俺としましては、こういうおもしろい体験が出来たのが嬉しくて、まあ生きていて良かったと思ったし、とにかく長生きしてこの世界を見ていきたいと思いました。もっと面白くなる気がするんですよ。

ユリイカ (青土社)

2012年8月 増刊号 p.215 「絵筆とペン」